

平成 21 年 5 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520294
 研究課題名（和文） 言語使用実態に基づくドイツ語動詞データベースの構築

研究課題名（英文） A usage-based database of German verbs

研究代表者

氏名（ローマ字）：清野 智昭（SEINO TOMOAKI）
 所属機関・部局・職：千葉大学・言語教育センター・准教授
 研究者番号：10226623

研究成果の概要：

本研究の目的は、ドイツ語の基本動詞を対象にその使用実態に基づいてデータベースを構築することである。特に、接触打撃動詞と心理動詞についてまず精度の高いデータベースを作成すること重点を置き、最終的に約 350 動詞について、IDS のコーパスによって収集した 300 の例文につき、形態的特性（品詞属性など）、統語的特性（格形、文における位置など）、意味的特性（指示物の特性など）を付与するほか、文全体に語用論的特性（発話状況、発話行為など）を付与したデータベースを作成した。これにより、ドイツ語使用実態を解明するデータの基盤の構築に成功した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	330,000	2,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：ドイツ語、データベース、コーパス、心理同土、接触・打撃動詞

1. 研究開始当初の背景

現在の言語研究においては、生成文法に代表される母語話者の直観を重視し、言語能力の解明を目指す立場と、大量の言語資

料を用い、そこから言語の使用実態を明らかにすることを目指すコーパス言語学の立場がある。後者は、近年、Usage Based Model の援用という形で発展しつつあるが、

それらの多くは特定の項や構文の特徴づけを目指しており、基本動詞の包括的な記述を目指したものではない。特に、ドイツ語研究においては、英語研究に比べて、研究はかなり遅れているといわざるを得ない状況であった。

実際のコーパス資料に基づき、動詞の使用条件を記述する必要性は、すでに1998年に東京外国語大学の在間進教授により提唱されており(「コーパスを用いた新しいドイツ語研究の方向性」日本独文学会1998年春季研究発表会シンポジウム。), 研究代表者もその研究グループの一員として、新しい結合価理論構築にむけた「言語使用に基づく文意味論」を提唱し、平成15年度～16年度に行った科学研究費補助金による研究(「対格の実現に関わる認知スキーマの日独対照研究」)により、対格と与格、対格と前置詞格の相違を示す動詞に関してはデータベース化が行われたが、包括的な動詞のデータベースは未だに作られていなかった。一方、ドイツでは *Institut für Deutsche Sprache* (=IDS) により、大規模なテキストコーパスが作成されており、質の高い原資料が入手可能な状態である。このIDSのコーパスを用いて、言語使用に基づいた動詞結合価のデータベース(および辞書)を作成することは、海外のゲルマニストとしてのドイツのゲルマニスティクに対する大きな貢献になることが期待された。

2. 研究の目的

本研究は、実際の言語使用をもとにドイツ語の動詞の結合価を新たに記述し直す試みである。

(1) ドイツ語のコーパスにおいて、基本動詞の例文を収集する。

(2) 収集した例文の各文成分に統語的、意味的、語用論的特性を付与してデータベース化する。

(3) その資料を基に、ドイツ語動詞の実際の使用の特性を記述するモデルを開発する。

(4) 開発した手法および収集分析された資料をもとに、実際の言語使用に基づくドイツ語動詞の結合価辞書を作成する。

これらの点を踏まえ、従来のドイツ語結合価辞書の弱点を克服し、実際の言語使用を忠実に反映した新しい結合価辞書を作成することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

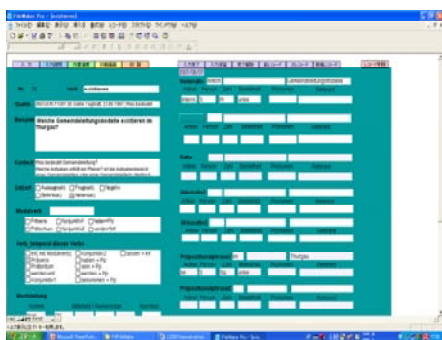
使用頻度の高いドイツ語動詞、特に、接触・打撃動詞と心理動詞に関してデータベース化する。一つの動詞につき、平均300の用例を収集する。昨年同様、一つの動詞につき、平均300の用例を収集した。すべて、IDS (*Institut für Deutsche Sprache*) が提供するCOSMAS IIをオンラインで使用する。収集目的に外れる例もヒットするので、それらを除外し、収集目的にかなった元データを作成してから、それをデータベースソフト (*Filemaker*) を用いて、各文成分に、形態的特性(品詞属性など)、統語的特性(格形、文における位置など)、意味的特性(指示物の特性など)を付与するほか、文全体に語用論的特性(発話状況、発話行為など)を付与する。

これらの作業をするとともに、動詞の記述に有意義なデータベースを設計し、改良を加えていく。

さらに、得られた資料を用いて、実際に接触・打撃動詞と心理動詞について、その用法の解明を行う。

4. 研究成果

本研究の成果として、まず、ドイツ語動詞の使用実態に基づいたデータベースを設計できたことが挙げられる。つまり、どのような素性を記述すれば、動詞の用法の解明に有意義かを理論的、経験的に確かめたことである。以下は、設計したデータベースの入力画面である。



記述した項目を挙げる：

- [Nr.] 通し番号 [Verb] 対象動詞 [Quelle] 出典 [Beispiel] 分析対象文 [Kontext] コンテキスト [Satzart] 文の種類 (平叙文, 疑問文, 否定, 命令文, 副文)
- [Modalverb] 話法の助動詞 (種類, 時制)
- [Verb_Temporal dieses Verbs] 動詞の時制と法。複数組み合わせ。(不定詞, 現在, 過去, werden + 不定詞, 接続法 I, II, haben + 過去分詞, sein + 過去分詞, werden + 過去分詞, bekommen + 過去分詞, lassen + 不定詞)
- [Wortstellung] 語順 (前域, 中域 1 ~ 4, 後域)
- [Adverb1-3] 副詞要素 (場所, 時間, 様態)
- [Nominativ, Genitiv, Dativ, Akkusativ1-2] 主格 (1 格), 属格 (2 格), 与格 (3 格), 対格 (4 格)。冠詞, 人称, 数, 有生性, 代名詞等,
- [Präpositionalphrase1-3] 前置詞句

各動詞について 300 例文を集め、これらの情報を付与した。作業効率の向上と研究上の

必要性により、接触打撃動詞と心理動詞についてまず精度の高いデータベースを作成し、その後、主に他動詞についてデータベース化を進め、最終的に約 350 動詞について、上記の形態的特性 (品詞属性など)、統語的特性 (格形, 文における位置など)、意味的特性 (指示物の特性など) を付与するほか、文全体に語用論的特性 (発話状況, 発話行為など) を付与したデータベースを作成した。これにより、今後の研究に役立つ質の高い資料を収集できたこと、そして、コーパスをデータ化する際のような問題点を明らかにできたことは、大きな意義があるといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①清野智昭: コーパス言語学の現在と当シンポジウムの意義。『コーパスをめぐって—心理・知覚動詞の分析』日本独文学会研究叢書。2009 年。査読有。(印刷中)

②清野智昭: コーパス言語学の現在と当シンポジウムの意義。『コーパスを用いた心理動詞分析』日本独文学会研究叢書。2009 年。査読有。(印刷中)

[学会発表] (計 3 件)

①清野智昭: 「心理動詞の使用実態 —コーパス分析から見えてくるもの」。日本独文学会秋季研究発表会, シンポジウム『コーパスをめぐって: 心理・知覚動詞の分析』2009 年 10 月 13 日

②Seino, Tomoaki & Ikuta, Sachiko: Zur Erstellung einer korpusbasierten Datenbank deutscher Verben. 日本独文学会第 35 回語学ゼミナール。2007 年 8 月 29 日。

③Seino, Tomoaki: Das cognitive Schema der der Akkusativrealisierung anhand von Verben des Schlagens. 日本独文学会第 34 回語学ゼミナール。2006 年 9 月 3 日。

[図書] (計 1 件)

①清野智昭: 『中級ドイツ語のしくみ』。白水社。2008 年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清野 智昭 (SEINO TOMOAKI)

千葉大学・言語教育センター・准教授

研究者番号: 10226623

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者